

都市の緑
3
表彰

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「屋上・壁面緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十賜

第20回 「SAKURA MACHI Kumamoto」 屋上・壁面緑化技術コンクール 国土交通大臣賞:屋上緑化部門

2019年9月、熊本市中央区桜町に複合型商業施設「SAKURA MACHI Kumamoto」(以下、サクラマチ)がオープンした。同施設は、1969年に開業し、当時、東洋一の規模を誇るといわれたバスターミナル「熊本交通センター」建て替えを中心とする、中心市街地再開発事業として完成したものの。バスターミナル機能はそのままに(停留所名は「熊本桜町バスターミナル」に改称)、スムーズな動線、バリアフリー化などに配慮してリニューアル

されると共に、地下1階、地上5階の施設内には、ファッションやコスメなどのショップの他、飲食店、シネマコンプレックス、スポーツジム、保育所などが入居。また、コンベンションホール「熊本城ホール」、ホテル、マンションなども併設され、一帯は新たに生まれ変わった。

サクラマチを運営する九州産交ランドマーク株式会社営業企画推進プロジェクト部長の片岡隆博さんは、事業の経緯を次のように教えてくれる。

「バスターミナルの老朽化、耐震性やバリアフリー化の課題などから、建て替えの必要性が検討されていました。一方、熊本市でも中心市街地活性化を目的に、バスターミナルに隣接する花畑公園・花畑広場一帯を歩行者空間として整備する計画や、コンベンション



上●中心市街地に誕生した緑のオアシス「SAKURA MACHI Kumamoto」
右●フロアごとに設けられた「ストリートビューテラス」。植栽の木陰にはカウンターテーブルとスツールが設置され、一休みするのに格好の空間



左●屋上庭園「サクラマチガーデン」。春陽庭をモチーフにした庭園の水景越しに熊本城を望む。「熊本城と庭つき」を実感できる景観軸
上●築山の頂上からも、熊本城がよく見える

ホールの開設などの計画がありました。そこでこうした動きと連動し、熊本都市計画・第一種市街地再開発事業の一環として取り組みました」

熊本の歴史と文化をつなぐ 屋上庭園

サクラマチはバスターミナルという公共交通拠点であることも含め、商業施設でありながら、市民に開かれた、公共的な空間としての役割も担っている。そしてこのことを表現しているのが、施設全体を覆う緑化空間の豊富さだ。屋上庭園「サクラマチガーデン」を含め、2~6階までがひな壇状に連なる「ストリートビューテラス」には、

高木を含む多彩な草木が植栽され、まるで立体的な公園のように見える。建築面積27,206.32㎡のうち、緑地として整備した空間は10,765.34㎡、うち緑被面積は6205.2㎡に及ぶという。これにより施設の東側、中心市街地方向の花畑公園・花畑広場、西側の背後に聳える金峰山、そして北側の熊本城とその城郭を形成する茶臼山が、緑を介して、サクラマチと一体的に感じられる。

とくに、サクラマチガーデンでは「熊本城と庭つき」をコンセプトに、地上約30mの高さを生かし、熊本城を視覚的につなぐ新たな景観軸を創出。また、屋上とは思えないほどに豊かな

緑化空間は、かつて当地にあったとされる細川家ゆかりの庭園「春陽庭」にならない、借景・水景・築山・舞台という四つの要素を取り入れ、熊本城下として発達してきた町の歴史と文化を感じさせる設えとした。

「サクラマチガーデンには二面性をもたせています。西側は池と水路を中心に緑のなかを回遊できる、春陽庭をモチーフにした日本庭園風に。南側と市街地方向のテラスについてはカフェスペースも配し、お客さまがゆっくり憩い、安らぎ、くつろげるような空間として整備しました」(片岡さん)

植栽された草木はおよそ200種、3000本。「サクラマチ」という名称だ



●庭園内を回遊できる小道。この辺りは、シーズンになればアジサイに彩られる



左●水深15cmの池に入り、水遊びをする親子。水に入ることも自由で、暑い日には市民プールかと思うほどにたくさんの子もたちが水遊びに興じているという
上●庭園の奥に配された木陰のベンチで談笑するグループ



上●サクラマチガーデンの南側のテーブルスペース。カフェスタンドもあるが、持ってきたお弁当を食べたり、休憩したりと、自由に利用できる

右●サクラマチガーデンの一角には滑り台があり、子どもたちが遊ぶ姿が絶えない

けに、もちろんサクラも数品種植えられているが、早春のウメ、初夏のアジサイ、秋は紅葉と、四季を通じて色とりどりの草花を楽しみ、季節の移ろいを感じられるよう配慮しているという。

また、サクラマチに隣接する「熊本城ホール」屋上にも緑化を実施。こちらには普段は関係者以外の立ち入りはないが、屋上緑化による施設の省エネやヒートアイランド抑止効果などに配慮している。ただ、今後はその眺望を生かし、星空の観察イベントなどにも利用していく計画があるという。

「くまモン盛土」で オリジナリティあふれる緑化

それにしても、建物の屋上にこれだけの緑を実現するには、建物の構造自体も強固にする必要がある。ウメやサクラを始め、アカマツ、クロマツなどの高木も多く植栽されており、これらの樹木が育つために必要な土だけでも、建物には相当な荷重がかかる。また、これほどの植栽を常に良好に保つための労力やコストも、相当かかっていることは間違いない。

「当然、建築コストも、植栽の維持管

理の面でもコストはかかります。ですが、このコストを負担してでもこうした自然の環境を実現し、そのなかで、訪れた方々にゆっくり寛いでいただきたい。そのことが、私どもの施設だけではなく、熊本市の中心市街地の魅力向上につながるものとして取り組んでいます。これほどの緑化は、施設運営の合理性だけでは実現が難しいからこそ、それがサクラマチ独自のストロングポイントだとも考えています」(片岡さん)

植栽に関して、サクラマチオリジナルの工夫もある。その一つが「くまモン盛土」だ。高木を植えるためには、それなりの土壌厚が必要で、一般的に



●樹木の根本をリュウノヒゲマットで覆うことで、立ち上がり部分を自然に感じさせる「くまモン盛土」



は必要な箇所に盛土をするのだが、その根本、コンクリートで造作した立ち上がり部分が見えてしまうと、どうしても人工的な印象が際立つ。そこで、麻土嚢を積み上げて必要な土壌厚を確保し、さらにその表面を、リュウノヒゲをシート状に植えた「リュウノヒゲマット」で覆うように固定。フサフサとしたリュウノヒゲが丸いシルエットを描く様は可愛らしく、ご当地キャラクター「くまモン」をイメージさせることから「くまモン盛土」の愛称がついた。家族連れも多く訪れる施設であることを考慮した工夫であると共に、工期の短縮と緑化の品質向上に大きく貢献しているという。

時代のニーズを先取りしたオープンスペース

ゴールデンウィークを控えたこの日、熊本市では「くまもと花とみどりの博覧会」が開催されていた。サクラマチ周辺も会場の一つとなっており、花畑公園との間に伸びる歩行者空間「シンボルプロムナード」には県産花弁約7万株を使用した巨大花壇や花を使った立体的なオブジェが展示され、華やかな空間が誕生していた。ウィークデーながら訪れる人は多く、サクラマチガーデンにも、花とみどりの博覧会と合わせて訪れたらしい家族連れや若者グループの姿がある。屋上庭園内を歩くと、木陰のベンチで会話に興じる人々、熊本城のビュースポットで写真を撮るカップル、池で遊ぶ親子など、緑の空間を思い思いに楽しんでいる。

また、各フロアに設けられた「ストリートビューテラス」には、植栽に合わせてカウンター式のテーブルとスツールが設置されており、パソコンを開いて仕事をするビジネスマン、一人読書を楽しむ人の姿も見られた。

「サクラマチのオープン」は2019年9月なので、以来、4、5カ月は通常通りの営業ができましたが、すぐに新型コロナウイルス感染症が拡大してしまい、計画通りの運営が厳しい状況に。それでも、当施設は屋外空間が充実し



左●サクラマチ2階、バスターミナルと連動したコンコース
上●施設内に展示されていた模型。ひな壇状のストリートビューテラスの構造がよくわかる

ていることから、比較的、お客さまに利用していただきやすい環境ではあると思います。またテラスや屋上ではリモートワークをされる方の姿もよくお見受けしますので、ある意味、先進的な空間として整備されたのかな、とは思っています」(片岡さん)

また、工事中の2016年には、熊本地震にも見舞われた。旧施設の解体工事中であったため、施設としては大きな被害はなかったが、これを受け、一部計画の見直しが行われた。耐震強度のさらなる向上を始め、一時避難所として1万1000人が3日間、サクラマチに滞在できるようにするなどの性能強化を実施した。この他、被災時に片岡さん自身が避難所や狭いクルマの中で不安な日々を過ごした経験から、施設内に明るい自然光を取り入れたい

と、施設中央、コンコース上の屋根をガラスのトップライトに変更したそう

だ。
熊本桜町バスターミナルは、熊本空港からのリムジンバスを始め、各種高速バス、熊本市圏のほとんどの路線バスが発着する交通の要衝だ。それだけにサクラマチは、市内からのショッピング客はもとより、国内旅行者、ビジネス、インバウンドを含め、国内外からの、多くの人々が集うことを前提に計画された施設でもある。オープンから3年、新型コロナウイルス感染症の影響から、まだ、計画時の集客は戻っていない。だが、その間にもサクラマチの「ストロングポイント」である緑の空間は順調に成長し、中心市街地の緑のオアシスとしての魅力も、いっそう増しているようだ。今後、より多くの人々が心置きなく、その魅力を満喫できる日が待ち遠しい。

緑化技術の概要

作品面積	10,765.34㎡
設計上の荷重条件	2,000kg/㎡(成長分見込み)
実際の荷重	1,200kg/㎡
階数	2,3,4,5,6階屋上、熊本城ホール屋上、駐車場棟屋上
土壌厚	200～1,400mm
土壌の種類と名称	人工軽量土壌
土壌の湿潤比重	1.0
植栽数量	高木：460本 中木：410本 低木：2,251本 地被：リュウノヒゲマット約750㎡、芝生約1,835㎡
灌水方法	年間タイマー付き 点滴式自動灌水



●併設された「熊本城ホール」の屋上も一部緑化されている